

ポール・モランのコスモポリチスム

中島裕之 博士後期課程5年

1923年、フランスのジャーナリズムは、ポール・モラン、ヴァレリー・ラルポー、ジャン・ジロドゥー、ピエール・マッコルラン等の作品に就て“cosmopolitisme nouveau”なる名称を与えた。〈Nouvelles Littéraires〉の同年5月号ではモランの当時の最新作《Fermé la nuit》(夜とぞす)を取上げ、そこに見出すことのできる、従来のコスモポリチスムからの変容を指摘していた。同誌編集長フレデリック・ルフェーヴルの対談“Une heure avec . . .”に招かれたモランは次のように答えている。

「自分としては、エグゾチスムという着色写真を流行遅れにすることに貢献できれば幸いです。語源的に言えばエグゾチックというのは、外側に在るもの、の意です。エグゾチスム、それは内側に在るものを排除し、また犠牲にして、遠方にあるもの、我々の国境の外にあるものを文学的に利用することなのです。私たちのやろうとしているのは全く反対のことです。それは、我々自身のため、また他所の人々のために、我が国と世界の国々とのあいだに、新しい、正確な、絶え間ない関係を作るということです。」¹⁾

これが、モラン自身による、コスモポリチスムの定義である。ロマン主義時代の外国の描写は、数少ない資料と、主に想像力に頼って為されたものであった。モランは「我々の文学から、ロマン主義の骨董を掃き出すには、彼等が描いた異国の絵画をわざと破いてやるのが良策でしょう」と言っている。エグゾチックというのを、その地方に特有の性質というくらいの意味で解釈するならば、モランの非難するのは、誤ったエグゾチスム、またエグゾチスムの濫用である。1929年の戯曲《Le Voyageur et l'amour》でモランは、シャムにシャム猫がいないことや、中国人がもう纏足をしていないこと、ビルマの女性が歯を黒くするのを止めたことなどを挙げ、今までエグゾチスムの訂正を行っている。1938年にピエール・ジュールダの『シャトーブリアン以降のフランス文学に於るエグゾチスム』が出版された際にモランは「ロマン主義のエグゾチスムの凡作のカタログであり、風変わりなことによって月並みな風景のリストである」と評している。つまり英国といえば憂うつで霧に煙っており、イタリアといえば月の明りにゴンドラ、ロシアはキャビアとコサックの酒宴、という具合である。これに対して“モランのエグゾチスム”ということに敢えて言うな

らば、それは各々の国の一人の人間を通じて表現されている。⁽²⁾

さて、このコスモポリチスムという、世界との付き合い方は、やや漠然とした所があるので、ここでエグゾチスムとの対比を含めて考えてみたい。

エグゾチスムには2種類ある。空間のエグゾチスムと、時間のエグゾチスムである。一般に使われるのは前者の意味であるが、時間のエグゾチスムという語は例えばゴンクール兄弟の日記の中で、フロベールの『サランポー』に就て使われている。空間のエグゾチスムに対するものがコスモポリチスムだとすれば、時間のエグゾチスムに対するものには、例えば、プルーストの時間、遍在する時間（汎時間）というものがある。そして『サランポー』の時間のエグゾチスムが、現実、現在からの逃避を感じさせるのに対して、プルーストの時間に於ては、過去もまた現在であり、現在が拡がっていく感じを覚える。コスモポリチスムもまた、逃避ではなく、普遍的なものを求める心であり、そこには自分の世界の拡がりが見られる。勿論、遍在する時間と云っても、基になっているのは現在であり、その様にコスモポリットも基盤として祖国を持っている。コスモポリットは sans-patrie（無国籍）に非ず、なのである。

さて、空間のエグゾチスムに話を戻して、その代表的な作家の一人ピエール・ロチの『お菊さん』（1887年）の一節を引用してみよう。

「今まで私はいつも彼女の guitare と書いていた。私が濫用するといってよく非難されるあのエグゾチックな言葉を避ける為に。(・・・)そして私は、私のムスメのことをキクとかキクサンと呼ぼう。このほうがクリザンテームという名前より一層彼女に相応しい。クリザンテームというのは、意味を正確にとって彼女の名前を訳したのである。けれどもその中には、奇妙な調べ (bizarre euphonie) が保たれていない」⁽³⁾。これを読むと、自分が接する異国の物や、人に就てさえも、奇異なところを描かなくてはならない、というエグゾチスム作家としての使命のようなものを感じてしまう。自分の生活している所から他所に赴き、そこに奇異なところを見つけて喜ぶのは、touriste、つまり物見遊山の客である。そこで生活しようと思う者や、その人たちと人間らしい付き合いをしようと思う者は、そこに自分たちと似ているところ、同じところを見つけたほうが嬉しいはずである。⁽⁴⁾サ

ルトルは『文学とは何か』(1948年)の中で、モランの作品は諸国を、諸大陸を無化し、地方色を無くそうと狙っている、と書いているが、それは正に、観光客が喜ぶような地方色ではなからうか。その国に住む人々が、快適さ、生活の便利さなどを求めた結果が、外部のエグゾチスム愛好者から、地方色を損なうという非難されるということもあり得る。サルトルは「結局、至る所で同じような単調な世界の他は何も残っていない」と言っているが。

さてピエール・ジュールダは前掲書の中で、様々な種族が互いに近付き、文明や交通機関が発達することによって、画一的な人間の型が出来てしまい、エグゾチスムを殺してしまう危険がある、と書いている。そしてゴーチエの「皆が同じ様になってしまったら、旅行は全く不要なものになるだろう」という一文を引用しながらも、その後ジュールダは大事なことを言っている。「もし我々が、燕尾服やモーニングを着ている日本人を見たとしても、そこになお種族と習慣の違いを感じるだろう」⁶⁾。いかに欧米化されたにせよそこが東洋であることに変わり無く、それが正しい、新しい地方色なのである。“*inégalité des races*”⁶⁾を説くゴビノオは、モランの青年期に於る重要な読書経験の一つだ。世界の人々が異なっていることはモランにとっては大前提であり、しかし異ならない部分もあることを彼は知っていたのである。

再びサルトルの引用である。「モランはアジア人をロンドンに、アメリカ人をシリアに、トルコ人をノルウェーに散歩させる。彼はそれらの眼を通して、我々の習慣を見させる、モンテスキューがペルシア人の眼を通してしたように。これは、彼等の存在理由の全てを取り除く、最も確かな手段である。しかも、同時に、これらの訪問者たちが、自分たちの本来の純粋さを多く失ってしまい、しかも我々の習慣を自分のものとして取入れることもなく、自分たちの風習の裏切り者になってしまう、という風にモランは都合する」⁷⁾

アジア人をロンドンに、というのは、モランの1927年の小説《*Bouddha vivant*》を指している。これは、東洋の小王国カラストラの王子ジャーリが、世界を知るために、国を脱け出し、ロンドン、パリ、ニューヨークを

旅し、結局はカラストラ王国に戻り、即位するという物語である。ジャーリは、サルトルの批評とは逆に、この旅を通して自分の存在理由を明らかにし（アイデンティティを確立し）、無知を補い、しかし西欧の風習を鵜呑みにすることなく、自分の国へと帰って行く、というように私には読める。

さて、ここでモランのコスモポリチスムの起源を考察してみよう。彼の祖父はペテルスブルグ帝室青銅所長の任にあり、父のウジェーヌはそこで生まれた。ポール・モランは、様々な国からの生徒が集まる政治学院（Sciences Po）に学びながら、ミュンヘン、エジンバラ、オックスフォードに留学している。その学生時代の家庭教師がジャン・ジロドゥーだったのだが、彼の勧めによってモランは1906年、18才の時にジョゼフ・テクストの論文「ジャン＝ジャック・ルソーと文学的コスモポリチスムの諸起源」（1895年）⁶⁾を読み、大きな影響を受ける。この論文はフランスに於る比較文学の起源であり、フランス文学の革新を考えるならば、フランス文学・文明の孤立状態を避け、また古典研究のみに満足することなく、近代の外国文学へと目を向けることも必要である、と説いていた。

モランが初めて小説を書いたのは1910～11年のことであった。《Les Extravagants》という題名で、「コスモポリットなボヘミアンの生活諸情景」という副題が付いている。物語の内容は、自伝的要素も強く、パリの富裕な青年がロンドンに渡り、恋をして、途中カーンでの兵役を経て、やがてヴェニスでまた新しい恋を見つける、といったもので、ページ数としては、恋愛の部分に多くが費されているが、プロローグに於るコスモポリチスムの高らかなる標榜と、カーンに於る兵役および戦争に対する嫌悪が注目に値する。

プロローグには、主人公と美術批評家が口論する場面がある。批評家は、ボードレールが外国人にも評価されるとすれば、それは彼が二流の詩人であるからだ、我々の国境の外では知られていないというのが、本当に偉大なフランスの詩人である、と述べる。そして「その他の者はエグズチックなのだ。エグズチスムとは、芸術の病い、寄生物障害である。全て芸術は、生き続ける為には、祖国の観念を目覚めさせ、それを強める必要がある」と続ける。主人公はこれに対して曰く、「ボードレールがフランス国外で

も反響を得ているのは、彼がいつの世にも変らない、皆に受止められ、理解される事柄を歌っているからです。今日、全ての思想、全ての美のかたちは、それが本当に新しく面白いものならば、普遍的（universal）な性格を持つことになると思われます」⁹

この美術批評家の、「エグゾチスムとは寄生物障害である」という発言は、モラン自身の、「エグゾチスムとは内側にあるものを犠牲にして、外側にあるものを利用すること」という言葉に呼応するものであるが、では、そのエグゾチスムに何を対抗させるかという、モランは勿論コスモポリチスムであり、美術批評家のほうは、愛国主義であり、外国人嫌いのナショナリズムである。この批評家は、ある種の人々の代表として描かれているわけだが、そういった人々は、コスモポリットと無国籍者を同一視する傾向がある。ところが、モランの考えるコスモポリットにとって、祖国を愛することと、外国を受入れることは両立するのである。それは、この序章に、エピグラフとして、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』の一節¹⁰と共に引用されている、スタール夫人¹¹の著作からも説明できる。『文学論』では、一つの芸術作品を正しく評価するためには、まずそれを国民性と、その作品を生んだ民族の歴史的発展に結び付けねばならないことを説いている。そして『ドイツ論』では、我々の文学がそれによって脅かされている不毛性に対処するために、この国の文学により活気のある樹液を注入しなければならぬ、それにはドイツの作家を研究するのが良い、と述べている。

ところで先の美術批評家の発言は、偉大な作家には郷土的雰囲気が必要だという、ポール・ブルジェの説を想起させる。それは彼の『現代心理論叢』（1883年）に於るスタンダール論の中の“ペイルのコスモポリチスム”という章に書かれている。「コスモポリットの精神が、危険であると同様に有益であるかは考えに値する」とブルジェは言っている。そして、「人間という植物が丈夫に成長し、より頑丈な新芽を付ける為には、人間という植物は自らの内に、目立たない、日毎の力強い作業によって、ただ一つの場所から出てくる物質的または精神的活力を吸収しなければならない」¹²と説いている。ここでブルジェの説に反駁する代りに、《Les

Extravagants》の序章に戻って、主人公の発言に耳を傾けよう。

「あなたはコスモポリチズムを何か新しい危険なもののように思っているようですが、これは古くからあった考え方です」。こう言って彼は中期ヤルネサンス期を例にひく。これに対し批評家が、その頃には共通の言語としてラテン語があった、と反論すると、主人公はこう答える。「素晴しくコスモポリットだった、18世紀を考えてごらんなさい。ラテン語が共通言語で無くなってから、外国語の実践が始まったのです。カテリーナからウォルポールまで、グリムからガリアーニまで、皆、フランス語を解したのです」。⁽¹³⁾ これに登場人物の一人である女性が、ディドロやヴォルテールの英国好みを付け加える。

このようにモランはその初めての小説の中で、18世紀風のコスモポリチズムを標榜していたのである。そして晩年の随想集《Venises》(1971年)にはこう書かれている。「1917年は、百科全書派以来初めてフランスに現れた、真のコスモポリットな世代にとっての絶望的な年である」。⁽¹⁴⁾

外交官試験に合格した後、ロンドン勤務を経てパリ在勤となり、ブリアン内閣の下、ダンディな平和主義者であるフィリップ・ベルトロ⁽¹⁵⁾に仕えていたモランにとって、第一次大戦は大きな打撃であった。《Les Extravagants》の主人公のコスモポリチズムは、戦争という障害にぶち当るのである。彼はカーンで軍隊生活を送るが、その描写の中で、モランが自己検閲によって削除している部分がある。戦争は、様々な国の若者たちの間を乱暴に引き裂き、皆を重い義務の下に苦しめ、彼等の若さの犠牲を要求する。兵舎での生活は、青年たちの貴重な力と時間の浪費の日々である、等々の記述がそこには見られる。

こういった主張と、後のモランに見られるような軽妙な筆致とは決して矛盾しないのである。モランは、1922年の《Ouvert la nuit》(夜ひらく)、翌年の《Fermé la nuit》は、死者たちの名において語っているのではなく、彼等を楽しませ、彼等に同情し、彼等のことを忘れないと言うために語っているのだと述べている。

さて、18世紀のコスモポリット、リーニュ公が⁽¹⁶⁾、クリミアでのロシア・トルコ戦争(1788～89年)から帰ってみると、彼の知っていたヨーロッ

パは、フランス革命によって全く変わってしまっていた。モランの知っていたヨーロッパは、第一次大戦によって破壊されてしまった。スコット・フィッツジェラルドが“Lost Generation”と呼んだ彼等の世代のことをモランは『夜ひらく』の中の一晩「ローマの夜」の中で、「男たちは皆戦争に行き、女たちは皆気違いになった、犠牲にされた一世代」⁽¹⁷⁾と書いている。モランがリーニュ公に就て書いたのは1963年であるが、初めての小説からも明らかな様に、18世紀のコスモポリチスムへの憧憬は以前から彼の内に在ったものである。故に、モランの作品、とりわけ、1925年以降の、ヨーロッパ以外の国々に就て書かれたもの⁽¹⁸⁾を評価する際に、18世紀のコスモポリチスムの特徴である、外国を受入れることにも柔軟であるが、基盤には祖国への愛があるという気質をふまえてはならない。モランのコスモポリチスムは1925年以降大きな変化を遂げたというのが通説なのであるが、その検証は、機会を改めて行ないたい。

「例外的なものを描くのが、普遍的なものに到達する手段である」とモランは言っていた。一見例外的に思われるモランの作中人物たちは、実は各々の国や時代を代表している。同様に、ポール・モランという Extravagant を通して、20世紀のヨーロッパの人間を理解するというのも出来そうである。⁽¹⁹⁾

【注】

- (1) 《Pour ma part, je serais très heureux si j'avais pu contribuer à démoder l'exotisme, cette photographie en couleurs. Etymologiquement, *exotique* veut dire: *ce qui est en dehors*. L'exotisme, c'est l'utilisation littéraire de ce qui se trouve au loin, hors de nos frontières, par exclusion et *aux dépens* de ce qui est au dedans. Or, ce que nous voulons faire, c'est justement le contraire: établir pour nous-mêmes et pour autrui des rapports nouveaux, exacts et constants entre notre pays et le reste de l'univers. Un des procédés les meilleures pour nettoyer notre littérature de tout le bric-à-brac des romantiques, c'est de fausser volontairement

les tableaux qu'on fait de l'étranger.》Frédéric Lefèvre, *Une heure avec... (2^{serie})*, Gallimard 1924, pp.31-32.

- (2) Cf. Benjamin Crémieux, *XX^e siècle, Première série*, Gallimard, 1924, p.216.
- (3) 《Jusqu'à présent j'avais toujours écrit sa *guitare* pour éviter ces termes exotiques dont on m'a reproché l'abus.
(...) Et j'appellerai ma mousmé *Kikou*, *Kikou-San*; ce nom lui va bien mieux que celui de Chrysanthème, -qui en traduit exactement le sens, mais n'en conserve pas la bizarre euphonie.》 Pierre Loti, *Madame Chrysanthème*, Flammarion, 1990, pp.203-204.
- (4) 「そのパリや京都が平気であるのはそこにいるものはそこに住んでいて観光客はそこを荒しに行くだけだからなんだ。そしてその逆を考えて御覧なさい。いや、外国の観光客が押し掛けて来ることじゃない。それはそのうちに来るだろうけれど、もし日本に来るといいうようなのが来始めてそれが例えばこの隣の卓子で飲んでいるという風なことになったらどうだろう」吉田健一『東京の昔』中央公論社, 1976, p.174.
- (5) 《si nous voyons des Japonais revêtir l'habit et la jaquette, il existe encore des différences de races et de mœurs.》
Pierre Jourda, *L'exotisme dans la littérature française depuis Chateaubriand*, Slatkine, 1970, p.22.
- (6) Cf. Gobineau, *Nouvelles asiatiques* (1876), Gallimard, 1949, p.16.
- (7) 《Morand promène des Asiatiques à Londres, des Américains en Syrie, des Turcs en Norvège; il fait voir nos coutumes par ces yeux, comme Montesquieu par ceux de ses Persans, ce qui est le moyen le plus sûr de leur ôter toute raison d'être. Mais, en même temps, il s'arrange pour que ces visiteurs aient beaucoup perdu de leur pureté primitive et soient déjà tout à fait traîtres à leurs mœurs sans avoir tout à fait adopté les nôtres;》
Jean-Paul Sartre, 《Qu'est-ce que la littérature》, in *Situations II*, Gallimard, 1948, p.226.
- (8) Joseph Texte, *Jean-Jacques Rousseau et les origines du cosmopolitisme littéraire. Etude sur les Relations Littéraires entre la France et l'Angleterre de XV^{III}^e siècle*, Hachette, 1895.
- (9) 《Si Baudelaire est goûté à l'étranger, j'ose avancer qu'il n'est qu'un écrivain de second ordre. Ceux-là seuls sont de grands poètes français qui restent ignorés hors de nos frontières. Les autres sont des exotiques. Or l'exotisme est un parasitisme, une maladie de l'art.
J'affirme que tout art, pour être viable, doit éveiller ou fortifier l'idée de patire.》

-Si Baudelaire a eu de l'écho hors de France, dit-il, c'est qu'il a chanté des choses éternelles, dignes d'être entendues et comprises de tous. Il me semble que de nos jours, ajouta-t-il, toute pensée, toute forme de beauté, si vraiment nouvelle et intéressante, est forcée de revêtir un caractère universel.)

Paul Morand, *Les Extravagants*, Gallimard, 1986, pp.26-27.

(10) 《It is an age so full of light, that there is scarce a country or corner of Europe whose beams are not crossed and interchanged with others.》この一節が引用されている。

(11) 《Désormais, il faut avoir l'esprit européen.》この句が引用されている。

(12) 《Pour que la plante humaine croisse solide, et capable de porter des rejets plus solides encore, il est nécessaire qu'elle absorbe en elle, par un travail puissant, quotidien et obscur, toute la sève physique et morale d'un endroit unique.》

Paul Bourget, *Essais de Psychologie contemporaine*, Alphonse Lemerre, 1886, pp.305-306.

この部分をルフェーヴルも、モランとの対談中に引いている。またルフェーヴルは、異国の地を高いところから観察し、常に距離を置いてその他の人々と付合うという“エゴチスム”を賞讃しており、モランの態度を“assimilation au pays”として暗に批判している。これに対してモランは直接には答えていないが、自分はジロドゥーやラルポーの系列のコスモポリットであることを明言している。

(13) 《Passons donc au siècle cosmopolite par excellence: le XV^{III}^e. Du jour où le latin cesse d'exister comme idiome courant, naît la pratique des langues étrangères. De Catherine à Walpole, de Grimm à Galiani, tout le monde entend le français.》 Paul Morand, *Les Extravagants*, Gallimard, 1986, p.28.

(14) 《Désespérante pour la seule génération vraiment cosmopolite apparue en France depuis les Encyclopédistes.》 Paul Morand, *Venises*, Gallimard, 1987, p.77.

(15) Philippe Berthelot (1866～1934)は当時の官房長。彼はモーリス・バレスの友人で、ミシアのサロンにも出入りしていた。一夜のポーカで勝った金で、外務省の庭にテニスコートを作らせたという逸話も残っている。ベルトロが趣味人であり対独協調派であるのに対して、ボワンカレは文学や美術に無関心な政治家で、対独強硬派であり、二人の間には大きな確執があった。1917年5月からはリボ内閣が発足し、官房長はジュール・カンボンに変わった。モランはリボを、好戦的な老人と見做していた。

(16) Prince de Ligne(1735～1814)は、オーストリア領ネーデルランドの軍人。ベルギーの古い貴族の家に生れ、七年戦争で活躍。オーストリアの外交使節としてペテルスブルグ滞在中ロシア皇帝エカテリーナ2世の寵愛を受け、クリミア戦争

に従軍。

(17) «-C'est une génération sacrifiée, madame, les hommes sont devenus soldats, les femmes sont devenues folles.»
Paul Morand, *Ouvert la nuit*, Gallimard, 1987, p.112.

(18) 1925年、モランは、バンコック駐在大使の任務を希望してシャムへ向うことになり、世界を一周し、日本にも立ち寄っている。以後、アメリカ、アフリカ、アジアを舞台にした作品も彼の著作目録に加わることになる。

(19) 未発表の日記が、モランの遺言によって西暦2000年に発表されることになっている。

